鍋山（南 屏 峡）名勝調査報告書

なべやま　なんびょうきょう

豊後高田市教育委員会

例　　言

１、本調査報告書は、鍋山（南屏峡）の意見具申に伴い作成した。

２、国登録記念物（名勝地関係）への意見具申に伴い、名称を「鍋山（南屏峡)」とする。

３、鍋山（南屏峡）について、平澤毅氏（文化庁文化財第二課)、山路康弘氏（大分県教育庁文化課）にご指導、ご助言をいただいた。また、杵築藩に関連する絵画資料に関する情報提供については、阿南雅希氏（杵築市教育委員会）にご協力いただいた。

４、本調査報告書の編集は豊後高田市教育委員会文化財室の松本卓也が担当した。

５、本調査報告書に使用した現況写真は、豊後高田市・豊後高田市教育委員会が撮影したものを使用した。表紙写真は地域活力創造課の友久亮が撮影した。
また、航空写真については豊後高田市のＧＩＳに使用された写真を、ドローンを使った写真については、令和３年度に耕地林業課の阿部博幸、馬場康任が操縦・撮影したものを使用した。

目　　次

第１章　鍋山（南屏峡）と周辺の環境
第１節　自然的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４
第２節　歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５
第３節　社会的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６
第４節　これまでの研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・７

第２章　鍋山（南屏峡）の概要
第１節　鍋山（南屏峡）の風致景観に対する評価の歴史的変遷・・８
第２節　構成要素及び周辺の要素・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
第３節　鍋山（南屏峡）の価値・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14

第３章　鍋山（南屏峡）と豊後高田市
第１節　名勝としての鍋山（南屏峡）の意味・・・・・・・・・・・15
第２節　保存活用について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15

参考文献・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16

資料編・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17
【図版】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
図１：鍋山（南屏峡）の対象地域の位置を示す図面
図２：田染地区大字図
図３：田染地区村境概要図（江戸時代）
図４：鍋山（南屏峡）周辺小字図
図５：鍋山（南屏峡）周辺の要素の位置図
図６：鍋山（南屏峡）範囲図（地形図）
図７：国東半島県立自然公園の規制の範囲
図８：鍋山（南屏峡）範囲図（公図）
図９：鍋山（南屏峡）範囲図（航空写真）
図 10：島原藩領田染組村絵図（観音堂村）
図 11：島原藩領田染組村絵図（上野村）
図 12：鍋岩図（十市石谷山水画冊）
図 13：田染八景図（安養寺蔵：正井和行作）

【鍋山（南屏峡）に関する文献等】・・・・・・・・・・・・・・・・・・27

【現況写真】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・31
写真１：鍋山（南屏峡）
写真２：鍋山（南屏峡）
写真３：鍋山（南屏峡）
写真４：三宮八幡神社から見た鍋山（南屏峡）
写真５：三宮八幡神社　遠景
写真６：三宮八幡神社　本殿
写真７：鍋山（南屏峡）　ドローン遠景
写真８：鍋山（南屏峡）　ドローン上部から

【参考：登録区域外】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・36
写真９：桂川（三の宮の景ふれあい河川公園）
写真 10：三の宮の景ふれあい河川公園の園地
写真 11：三の宮の景ふれあい河川公園の園地
写真 12：桂川でのボート体験の様子
写真 13：鍋山井堰
写真 14：鍋山磨崖仏

【古写真】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・39
写真 15：「鍋山」（『大分縣写真帖』（明治 40 年刊行）より）
写真 16：「鍋山」（『西国東郡誌』（大正 12 年刊行）より）
写真 17：「鍋山耶馬」（『田染村志』（昭和 7 年刊行）より）
写真 18：「三宮八幡神社」（『田染村志』（昭和 7 年刊行）より）
写真 19：「鍋山耶馬」（『豊後高田市誌』（昭和 32 年刊行）より）
写真 20：「田染耶馬」（『市報ぶんごたかだ』（昭和 47 年 8 月号）表紙より）
写真 21：「三の宮」（昭和 40 年代）

第１章　鍋山（南屏峡）と周辺の環境

第１節　自然的環境

〇地理・地形的特徴

鍋山（南屏峡）は、豊後高田市南部に位置する田染（たしぶ）地区の桂川上流域に位置する岩山・峡谷である。

国東半島は中央の両子山の火山活動によって形成された円形の半島であると説明されるが、田染地区は国東半島の付け根に位置し、大分県北部に特徴づけられる凝灰角礫岩質の火砕流堆積物（新生代新第三紀・古期宇佐火山岩類の火山砕屑岩）と、両子山の火山群（新生代第四紀）による岩石が、田染盆地を挟んで分布している。

田染地区においては、その地質を活かして大型の磨崖仏が作られてきた。田染平野地区の熊野磨崖仏【重要文化財・史跡】をはじめとして、鍋山磨崖仏【史跡】、元宮磨崖仏【史跡】、大門坊磨崖仏【市指定史跡】が挙げられるが、これらは全て古期宇佐火山岩類の火山砕屑岩の地質の範囲に作られている。また、凝灰角礫岩層が侵食作用によって岩峰が屹立する耶馬渓式景観を呈しており、国東半島各地に分布する天台宗寺院群である六郷山の修行場として利用された他、田染地域内の各地区で名前の付いた岩峰が多く所在し、伝承や民話などの素材になっている。

桂川は、両子山を水源とし、杵築市大田地区を通って、鍋山（南屏峡）の前から田染地区に流れ込み、河内地区を経て豊後高田市中心付近の河口に至る。桂川は田染荘・上野条里をはじめ、池部条里（田染池部）や川原（かわら）条里（美和）、小田原別符（おだわらべふ）（小田原（こだわら））などの条里遺跡や荘園の故地にあたる水田への水の供給を行っており、田染・高田地区にとって重要な河川である。桂川は中世から江戸時代中期にかけて高田川と呼ばれてきたが（建武４(1337)年の六郷山本中末寺次第幷四至等注文案を初見とし、江戸時代の島原藩の豊後国高田芝崎絵図など）、岡藩が享和３(1803)年に編纂した地誌『豊後国志』では既に桂川と記載されている。大正 12(1923)年刊行の『西国東郡誌』によれば、天明８(1788)年に大神（おおが）某(生没年不詳)が高田八景を定め、日野資枝（すけき）(1737-1801)が和歌を詠んだとあり、その中に桂川秋月とあるのが、現状の初見である。

鍋山（南屏峡）は、田染上野地区の南東端に位置し、杵築市大田地区との境界付近に位置する岩山で、田染地区における桂川の上流地点に位置する。古期宇佐火山岩類の火山砕屑岩の地質の範囲にあり、約９万年前の阿蘇カルデラ形成に伴う阿蘇４火砕流により、高度１００～１５０ｍにも及ぶ火砕流台地が形成された。その後、桂川による侵食を受けて、屹立した崖面を持つ渓谷が形成された。特に桂川の西側の部分については、長さ２００メートルの範囲に、２０～４０メートルの柱状の屹立した岩山が連なっている。岩山はほぼ垂直に立つが、一部の岩山は少しだけ不規則に傾いている。鍋山（南屏峡）の岩峰自体は安山岩からデイサイト質の凝灰角礫岩であり、岩山の表面を見ると礫（数センチ～３０センチほど）が多量に含まれており、非常にゴツゴツしているのが特徴である。また、火山砕屑岩の急崖には水平の層理構造が見られる。

田染地区では特に目立つ岩山で、桂川上流の取水地にあたる開発の重要地点にあたり、杵築に抜ける木付道や田染地区の鎮守の１つである三宮八幡神社から見えたことから、江戸時代前期には史資料にその景色についての記載が見られる。

○周辺の植生・動物

大分県の中でも国東半島は瀬戸内型気候域・旧火山地帯の植生が見られる。周防灘（すおうなだ）に面した地域は、年平均気温 15℃、年間降水量は 1500～1600㎜ で夏季の雨量は少ない地域である。冬季は周防灘を吹き抜ける冬季北西季節風の影響でしばしば降雪をみる。

鍋山（南屏峡）周辺は、コナラ群落及びコジイースダジイ群落に位置しているが、岩山の頂点付近などには比較的細い樹木が生育しており、岩と岩の間の部分に樹木や植物が生育している。イワシデ、マルバアオダモなどの紅葉・黄葉する樹木も生育し、秋には常緑樹とともに点々と紅葉・黄葉する樹木の様子を見ることができる。珍しい植物としては、エビネ（エビネラン）が岩間に生育している。エビネは田染地区や杵築市山香地区で多く生育、栽培がなされており、山香地区ではエビネの品評会が行われている。

第２節　歴史的環境

鍋山（南屏峡）が所在する田染上野は、豊後高田市南部の田染地区の中でも南東側、杵築市大田地区との境に位置しており、田染盆地における主要な取水地となっている。

古代の田染地区は国東郡田染郷に位置しており、田染盆地の低湿地を利用して弥生時代から古墳時代前期には既に水田が営まれていたが、奈良時代には田染盆地の上流域の岩盤を利用して鍋山井堰が設けられ、田染盆地に安定的な水資源の供給ができるようになり、上野条里が徐々に成立していった。平安時代後期には宇佐神宮の根本荘園・本御荘（ほんみしょう）十八箇所の１つとして田染荘が開かれた。その後、上野条里周辺地域は、中世を通して田染荘の中でも大規模な水田を維持しており、元和８(1622)年の小倉藩人畜改帳によれば、上野村の村高は 555 石余とあり、周辺の地区よりも豊かな村であったとされ、江戸時代後期の新池築造についても、田染組の各村に先駆けて実施をしている。鍋山井堰は、現在にいたるまでその位置と機能を維持しており、鍋山井堰は上野地区の灌漑を象徴する井堰となっている。

鍋山井堰の重要性を示す遺跡としては、「鍋山磨崖仏」「三宮八幡神社」がある。鍋山磨崖仏は、鍋山井堰の北側の丘陵に位置する磨崖仏で、平安時代末期～鎌倉時代の造顕とされている。田染地区や大分県の磨崖仏は、水源地や水と関連した場所に配置されることが多く、熊野磨崖仏は熊野川源流に、大門坊磨崖仏は大井堰のすぐ傍に位置している。鍋山磨崖仏は、建武４(1337)年の六郷山寺院のリストである「六郷山本中末寺次第幷四至等注文案（『永弘文書』）」に稲積岩屋として登場し、馬城寺（まきじ）（現在の真木大堂など）の末寺とされている。現在は、「稲積」の呼称は観音堂村の稲積山慈恩寺に残っており、江戸時代には慈恩寺の霊場の１つとして伝わってきたとされている。

一方の三宮八幡神社は、中村の元宮八幡神社、間戸村の二宮八幡神社と並び田染三社とされる神社である。田染三社では旧暦 10 月 8 日の付近の日に、田染三社八幡宮大祭を実施し、それぞれの神社から神輿を舁いて、氏子圏の集落を巡りながら、田染上野・字市場の御旅所に集結し祝詞をあげる祭りである。この３つの神社は、田染地区の郷社八幡社（元宮八幡神社）を分祀したものであり、元宮八幡神社の縁起によれば、観応２(1351)年に神託により元宮八幡神社より、間戸大明神（湍津姫命）・稲積大明神（市杵島姫命）に還座したものとされる。これらの神社は農耕に関することから、井堰や水源地などに関わる場所につくられたと指摘されている。元宮八幡神社は田染荘最大の井堰「大井堰」、二宮八幡神社は湧き水があって雨乞いと関連が強い霊場「穴井戸観音」の傍にあり、三宮八幡神社の西側には鳥居を挟んで鍋山（南屏峡）の岩峰がよく見え、その岩盤を使って開発を行った田染荘における水や農耕の信仰と風景の関連性を読み解く素材となる。

中世から近世にかけての田染地区の状況や景観を知る資料として、「島原藩領田染組村絵図【大分県指定有形文化財】」がある。これは元禄２(1689)年に島原藩の御役所に差し出した村絵図を原本としており、天保７(1836)年に田染村の様子を再度調査するために地元に送付された地図を、庄屋らが書き写したものである。各村の絵図を参照すれば、横嶺村から小田原に抜ける道以外には「何ぞ相変わり候儀これ無し」と記載があるため、この絵図は元禄２年頃の田染地区の様子を知る資料として使われる。観音堂村と上野村の村絵図によれば、鍋山(南屏峡)や鍋山磨崖仏・三宮八幡神社の諸要素の位置関係に変化はない。

鍋山（南屏峡）は観音堂村の絵図に登場し、５つの岩の柱を並べて描いている。本絵図は特徴的な形状の岩山については、ランドマークとして認知できるように描かれているが、その中でも特徴を描かれた部分である。

一方、鍋山磨崖仏と三宮八幡神社は、上野村の絵図に描かれている。鍋山磨崖仏は周辺を大きな岩山に囲まれたような部分に描かれており、「不動」と注釈がある。三宮八幡神社は、「大明神」と注釈があり、本殿の他に拝殿と鳥居が描かれている。ただし、現在の社殿は明治時代に築かれたものとされている。

第３節　社会的環境

現在鍋山（南屏峡）は、県または市の指定名勝としては保護されていない。文化財以外の保護では、国東半島県立自然公園の一部（岩山部分は第２種特別区域／三宮八幡神社境内は第３種特別区域）となっている。

平成初頭に行われた大分県のふれあいの河川整備事業により、一帯の風景を「三の宮の景」と名付け、河川公園として整備を実施している。鍋山（南屏峡）を観賞しやすいよう、川の対岸に遊歩道・駐車場を取り付け、遊歩道沿いに桜の植樹を行うものである。河川自体もボートやカヌーが体験できるように整備を行っている。現在、河川公園の管理は地域住民が実施しており、遊歩道の清掃・除草、トイレの管理などを行っている。

しかしながら、田染地区においては、過疎化・人口減少がおこっており、周辺の賑わいを維持できなくなってきている状況もある。かつては三の宮まんじゅう（所謂、炭酸饅頭）を名物として出す土産物店があったが、現在では閉店をしてしまっている。鍋山（南屏峡）や鍋山磨崖仏を核にして、地域を盛り上げる指針を立てる必要がある。

豊後高田市教育委員会では、田染荘全域をフィールドミュージアムとして活用する取組を構想しており、富貴寺、真木大堂、熊野磨崖仏、田染荘小崎の農村景観をコアサイトとしつつ、田染荘全域のスケール感や歴史や景観を伝えるスポットを増やし、周遊性を高め、コンテンツに厚みを持たせる必要がある。田染荘の特設サイト（https://tashibunoshou.com）では、田染荘内の指定・未指定文化財を紹介し、観光客や地元住民が投稿した写真と紐づけて紹介する「#田染荘で撮りましょう」を運営している。

鍋山（南屏峡）を名勝地として保存し、景色や景観を活用する取組を継続することで、地域を盛り上げることに繋げたい。

第４節　これまでの研究

鍋山（南屏峡）の歴史的環境・自然的環境に関する検討は以下のようになされている。

田染荘における歴史学・文化財学的調査は昭和 56 年から行われた大分県立風土記の丘歴史民俗資料館（現大分県立歴史博物館）による豊後国田染荘の調査である。同調査では、田染地区に残る荘園時代の遺構や、立荘以前から昭和時代にかけての土地利用の変遷について考察がなされ、田染地区の景観が中世に由来する要素に特徴づけられることが確かめられた。鍋山に関しても、鍋山井堰の水利に関する遺構や、鍋山磨崖仏や三宮八幡神社などの信仰に関する遺構が整理され、田染荘における鍋山（南屏峡）周辺の重要性についても指摘された。

その後、平成初頭には田染荘遺跡の史跡指定の提案がなされたが、上野・池部・横嶺地区の圃場整備は進み、小崎地区に対しても圃場整備を行う動きが起こり、一時は保存を断念する事態にもなったが、農水省の田園空間博物館整備事業を受けて整備することが提起され、平成 11 年度からは同事業による整備を実施する方向性に舵を切った。その後、田染小崎地区は平成 22 年には重要文化的景観に選定され、荘園村落遺跡の景観の保全について、田染荘は高い評価を受けることになる。

一方で、当初の史跡指定のスケールとは違い、田染小崎の保存活用を行う中で、田染荘全域との連動が課題となっており、田染荘の水利・灌漑システムについて理解するために重要な鍋山周辺の景観や要素についても保護をする必要がある点は指摘され続けてきた。

自然に関する調査では、平成 19 年から行われた大分県生活環境部による国東半島県立自然公園自然環境学術調査が、国東半島の悉皆的な自然に関する調査としては最初のもので、地質・地形・植生・動物などの分野について調査が行われた。地質と地形に関する報告の中で、耶馬渓式景観を呈する範囲の事例として鍋山（南屏峡）の岩峰群について取り上げられている。

平成 26～27 年度にかけて行われた文化庁文化財部記念物課の名勝に関する特定の調査研究事業（大分県の名勝に関する特定の調査研究事業）においては、国東半島六郷山寺院に関する名勝調査が実施された。同調査においては、田染地区は一定の評価を受けながらも、六郷山寺院と関連して傑出する要素がないとして個別調査の対象から外れた。

そこで豊後高田市教育委員会では、平成 29～30 年度に文化庁の国宝重要文化財等保存整備費補助金を受けて追加の名勝調査を実施し、平成 31 年３月には『国東半島田染名勝調査報告書』を刊行した。

本調査では、島原藩領田染組村絵図に描かれる岩峰の位置及び絵図作成時の視点場について深い検討を加えた。それらの情報はベースマップとした森林基本図・村絵図に落としただけでなく、緯度経度に紐づけて整理し、Google マップ上でも表示ができるようにし、風致を形成する要素同士の位置関係等について、より分かりやすく整理することができた。

また、特筆すべき風致を持つ６ヶ所（鍋山・喜久山・朝日岩屋及び夕日岩屋・穴井戸観音・ウトノアナ及びゼゼノサマ・西叡山）について、文献調査や現地調査（踏査やドローン撮影）を実施し、調査委員の専門領域毎にもその価値をまとめていただいた。鍋山（南屏峡）は田染荘の歴史・信仰の両方に関連する要素として評価され、貝原益軒や井上円了らによって観賞的視点も添えられたことがまとめられた。

本調査によって、田染地区における岩峰群の風致のなりたちや特性、荘園時代に基盤を置く風致の時代的な連続性や関連性について、新たな知見を多く得ることができた。

第２章　鍋山（南屏峡）の内容と価値

第１節　鍋山（南屏峡）の風致景観に対する評価の歴史的変遷

〇中近世の鍋山（南屏峡）と貝原益軒『豊国紀行』

前章の歴史的環境でも述べたが、鍋山（南屏峡）のある一帯の岩盤は、上野条里にとって重要な水源となっていた。荘園経営にとって、水源地は重要な地点あり、周辺には信仰物がいくつか展開している。

取水地となっている鍋山井堰の対面の丘陵には、平安時代～鎌倉時代に造顕されたとされる鍋山磨崖仏がある。また、田染組の鎮守の１つである三宮八幡神社は鍋山の対岸に位置しているが、その縁起によれば、南北朝時代に元宮八幡神社の神（宗像三女神）の内、市杵島姫命を勧請して創建されたとされている。鍋山磨崖仏には稲積岩屋・稲積不動の別名があり、三宮八幡神社には稲積大明神の別名があり、密接な関係性があったとされている。

これら田染荘桂川上流の信仰物と密接な関係にあった鍋山（南屏峡）は、江戸時代前期に描かれた田染組観音堂村絵図（三宮八幡神社から見て、桂川の対岸は観音堂村にあたるため）に描かれている。この絵図そのものは、天保７年（1836）に作られた写しであるが、原本は元禄２年（1689）に制作されたもので、奥書の記載からも江戸時代前期の様子を示しているとされる。その際には、岩の柱が５つ並んでいるような独特な描かれ方をしている。

村絵図原本が成立した元禄期に鍋山について記載した紀行文が残されている。『豊国紀行』を著した福岡藩の儒学者・貝原益軒（1630-1714）は、元禄７年（1694）に福岡を出発し、飯塚、直方、香春、豊津、城井、椎田、中津の高瀬、大貞、宇佐を経て、国東半島へと差し掛かった。そして豊後高田から杵築道・波多方峠を通って杵築に向かう途中で、鍋山（南屏峡）の前を通っている。この記載により、当地はこの時代には既に「なべ山」と呼ばれていたことが分かり、高さ１０間（約 18.2m）または８～９間（約 14.5～16.3m）の大岩が１５～１６個連なっているという表現はやや誇張であるが、柱状になった岩自体は杵築市側などの周辺にも見られるため、それらを合算したものとも推測される。

> 高田より木付の間には馬驛なし、山中を通るに其ノ間田染と云村あり。高田より三里あり。此所にて暫く休む。田染より木付へ四里半あり。田染より東に半里許行て、道の西の傍に河の畔に高く峙ちて大岩十五六許つらなれり。其高さ十間餘り、或いは八九間あり。奇観なり。羅漢寺の前なる大岩に似たり。其外かやうの珍らしき岩まれなり。其所をなべ山といふ。夫より南方に山を越ゆくに、此間道さがしく坂長し、東南の方に山を登る事半里許にして嶺より木付の方へ下る事一里半あり。此坂をはたかた峠といふ。坂より田染のかたにははたかたといふ里あり。

以上のように、鍋山（南屏峡）については、江戸時代前期までの段階においては、田染荘の水源地・取水地として重要な地点であることから、磨崖仏や鎮守・三宮八幡神社といった信仰物が集中していたり、村絵図にも岩山の様子が描かれていた。

一方で街道（杵築道）上にあることから、貝原益軒の『豊国紀行』にも記載が見られ、当時から「なべ山」と呼ばれていたことと、益軒によって「奇観」「かようの珍らしき岩まれなり」などと評価された。

○田染八景の選定と井上円了による評価

江戸時代の後期から末期になると、大分県北部から国東半島にかけての景勝地に観賞的視点が加えられるようになる。天明８(1788)年には大神某が高田八景を選定し、日野資枝が和歌を詠み、文政元年(1818)に頼山陽が耶馬渓山天下無と漢詩を詠んだ翌年の文政２年には、国学者高井八穂（生没年未詳）らによって夷谷で和歌の題として夷谷八景が選定された。

田染では、杵築藩の武士・学者らによって芸術的な視点が添えられた。

杵築藩の家老の家に生まれた十市石谷（1793-1853）は、杵築南画（豊後南画の内、杵築藩士などで構成される画壇で、特に石谷とその子の王洋の絵画は近代初頭に高い評価を受けた。）の祖とされ、中津の片山東籬（生没年未詳）に絵を学び、田能村竹田（1777-1835）らとも交流があり、豊後高田では本草学者・賀来飛霞（1816-1894）などを弟子とするなど、国東半島で広く画業を行った人物である。十市石谷は、山水画の画題として田染八景を定めたとされる。田染八景は、叡峰曙雪・池部群鷺・桑川蛍火・本宮晴嵐・間戸山月・大堂晩鐘・熊岳櫻花・鍋山啼猿の８つの風物で、すべて場所を特定できる。

田染相原の安養寺にて昭和 30 年代に石谷の水墨画を見たという文書を発見したため、安養寺に確認をしたが詳細は不明であった。一方で、大分県で療養中であった正井和行（日本画家・1910-1999）が、1930 年代に描いたとされる田染八景図が残されており、田染八景が画題として伝わっていたことの１つの証となる。

その後、杵築の儒員・島徳世（生没年未詳）が八景に一首ずつ漢詩を詠んだとされ、鍋山啼猿については、次のように詠んだと伝えられている。

山間一路接溪長、行客争尋寂莫郷、誰識更探山静處、哀猿声裡断人腸、

これに対して、豊後高田市水崎・西光寺の東陽圓月（1818-1902、豊前・恒遠醒窓の門下で、西光寺に東陽学寮を作り、地域の教育に尽力した人物）は、明治 30 年頃に遺詠として鍋山啼猿と題した漢詩を詠んでいる。

両崖壁立昼幽冥、松樹倒懸似画屏、子母相呼真可愛、啼猿誰道不堪聴、

島徳世が静かな山に響く猿の悲しい声に断腸の思いがすると詠んだのに対して、東陽圓月は母子の猿の呼び合う可愛らしい声について、誰が聴くに堪えないと言うのかと返している。

明治 40 年(1907)、宮崎・大分への遊説に出た哲学者・井上円了（1858-1919）は、６月になると国東半島に訪れ、田染小学校（場所は現在の田染公民館）で講演をした際、鍋山を訪れてその風景を高く評価している。

円了が記した紀行文『南船北馬集　第２編』に収められたものであり、田染八景・鍋山などに言及し、漢詩を詠んだ上で、紀州熊野の瀞八丁と対比している。円了の田染地区の風景に関する記載は、他と比して分量でみてもかなり多く、また絶賛している。そして、この時円了は鍋谷（山）の呼称を、雅称ではないとして「南屏峡」と定めている。以下に該当部分を掲載する（漢詩訳は東洋大学創立 100 周年記念論文集編纂委員会編『井上円了選集 12』(1997 年)「南船北馬集　第２編」より)。

十七日　雨。当村には八景あり。その中にて奇なるは鍋山の勝なり。晨起してここに吟笻をひく。
昨日以来の経過を詩中に入るる。
端午時過梅漸黄、渓辺已見挿新秧、薫風西叡山南路、一夜来投田染郷、
(端午の時節もとうにすぎて梅はようやく黄ばみ、谷川のあたりではすでに新しい苗が植えられ

ているのを見た。初夏の青葉をふく風のなか、西叡山の南の道をたどり、一夜を田染村にすごしたのであった。）

樹色入窓灯影青、水声懸処認飛蛍、淡雲繊月多幽趣、繞屋翠巒為枕屏、

（濃い樹木の色が窓辺より入って、ともしびも青みをおびるかと思われ、渓水の流れる音のするあたりに蛍のとびかうのが見える。淡い雲やかぼそい月など、ここには奥深いおもむきがあり、家をめぐるみどりの山々はまるで枕屏風のように思われたのであった。）

晨起行過古社西、危岩兀立似雲梯、天工奇絶比無物、俚俗呼成小馬渓、

（朝早くに古い社の西を散策すれば、めずらしい形をした岩が高く立ちあがって、まるで雲にとどくはしごのようである。自然のたくみの絶妙であることは比べるものとてなく、この地の人々は小耶馬渓と呼んでいる。）

人これを小馬渓と呼ぶも、決して耶馬渓の付庸にあらず。あるいは紀南の瀞八丁に似、あるいは小豆島の寒霞渓に似たるところありて、全然独立せる一奇勝なり。これを鍋谷というは雅称にあらず。よって余は南屏峡と名付く。西叡山と好一対となる。

田染八勝とは大堂梵鐘、熊岳山桜、桑川流蛍、池部群鷺、間戸涼蟾、本宮晴嵐、鍋崕叫猿、叡峰雪暁をいう。余、一詩に八勝を入るる。

田染由来風月幽、国東此景最為優、雪明西叡峯頭暁、猿叫南屏峡畔秋、

間戸桑川宜夏望、本宮熊岳適春遊、鷺飛鐘吼朝兼夕、八勝四時好散憂、

（田染の地はもとより風月もおくゆかしく、国東地方におけるこの風景はもっともすぐれたものである。雪をいただく西叡山峰のあかつきのさま、猿の叫ぶ声がひびく南屏峡の秋、間戸や桑川は夏のおもむきをみるによく、本宮や熊岳は春の行楽によし。鷺がとび梵鐘は朝夕ともにひびきわたる。田染の八景勝は四季を通じて人の世の憂いを消すによい。）

聞く、臼野にも八勝ありという。余、これを一見せざりしは遺憾なり。

午後、大雨をおかして出演す。後に茶話会ありて、修身教会設置を決議す。発起者中に特に尽力ありしは豊田玄智氏、吉田秀導氏、桑尾重代氏等なり。桑尾氏は校長なり。

十八日　曇り。鍋谷を経て田原村に入る。生徒の歓迎、田染に異ならず。この辺り山容雲態おのずから仙郷の趣あり。

南屏峡外一郷開、雨過挿秧処々催、雲容山態非人境、民情風俗亦蓬莱、

（南屏峡のはずれに一村がひらけ、雨あがりのなかところどころで田植えがおこなわれている。雲のすがた山のようすは人の住むところとも思われぬ。この地の人の心も風俗もまた神仙が住むという蓬莱のおもむきがあるのである。）

を吟詠しつつ宝陀寺に着す。寺は大同年間の創立にして、有名の古刹なり。山門は丘上にあり、緑陰庭に満つる所、燕子花を見る。夏光の間、雅なるは愛すべし。

（後半略）

円了は古社（三宮八幡神社）に立って鍋山を眺めており、並び立つ岩山を雲梯に例えている。一帯が小耶馬渓と呼ばれていることを紹介した上で、田染八景の「叡峰雪暁」の西叡山との対比から鍋山を「南屏峡」と名付けている。

その後、国東半島を後にした円了は、宮崎・大分への遊説旅行での総括の部分にも、大分県が山水の景に富んでいると評価した上で、「紀州熊野地と相対して日本の絶勝地と定むべし。」と絶賛している。

> 二十二日　（前半略）
>
> 日向地方平地多くして山水の景に乏しきは、予想外に感ぜしと同時に、豊後地の平地に乏しくして山水の景に富めるは、また想像の外に出でたり。紀州熊野地と相対して日本の絶勝地と定むべし。人情も淳朴にして、よく賓客を厚遇歓待する風あり。また、風流を愛し雅致を喜ぶ風あり。ただ、公道および公共物に楽書を見ること、他府県より多きように感じたり。また、迷信も比較的多きがごとく認めり。また、宗教は一般に普及するも、旧式を固守するにとどまり、活動の風をあるを見ず。学校教育も一段の発展を要するがごとし。これ、余が今より修身教会を開設して公徳を養成し、風俗を矯正し迷信を一掃し、人をして進取活動せしむるの必要を感じたるゆえんなり。

〇地誌等による評価から現在にいたるまで

井上円了が来訪した明治 40 年 10 月には、大分県が県内の名所を集めた『大分縣写真帖』が発刊され、西国東では高田町全景、富貴寺、鍋山の３枚の写真が収録されている。それぞれに掛け紙があり、鍋山のページには以下のような文章が掲載されている。

> 鍋山
>
> 西国東郡の南部、田染村にあり。奇巌突兀（とっこつ）として、天に聳え、渓流潺湲（せんかん）影を蘸（ひた）して流る、風景頗る雅致、土人呼んで、小耶馬渓といふ。

その後も、田染地区を代表する景勝地として、地誌・市の刊行物に度々登場するようになる。

昭和７年刊行の『田染村志』では、井上円了の来訪と作詩、田染八景についての記述が見られるが、田染八景の選者について、十市王洋（？-1897、石谷の子）あるいは十市石谷としたり、名所旧跡の項の 1 つ「田染耶馬」を熊野耶馬・鍋山耶馬・間戸耶馬と分けて紹介している。十市石谷の絵については、その後、あまり知られない状況になってしまい、近代に入って東京で活躍し著名となった王洋が選者とする記載が生まれたと考えられる。井上円了に関する記載は、東陽圓月の弟子で、円了と交流の深かった玉津光圓寺の難波十洲（じっしゅう）（1855-1930）らによって地元に伝えられた。

平成初頭の大分県のふれあいの河川整備事業によって三の宮の景と名付けられ、現在の市の刊行物や県道沿いの案内標識などには、三の宮の景という名称が使われている。

☆年表

年号	事柄
奈良時代以降	鍋山周辺の河床の岩盤を利用して、上野条里などの水田開発が行われる。上野条里に引水する井堰は、現在でも鍋山イゼと呼ばれている。
平安～鎌倉時代	鍋山磨崖仏が造顕される。
観応２(1351)年	元宮八幡神社から市杵島姫命を分祀し、三宮八幡神社が創建される。
元禄２(1689)年	島原藩領田染組村絵図の内、観音堂村絵図に鍋山が、上野村絵図に三宮八幡神社が描かれる。
元禄７(1694)年	貝原益軒が鍋山周辺を訪れ、『豊国紀行』に鍋山周辺の景色について叙述。
江戸時代後期	杵築藩の絵師・十市石谷によって、田染八景が定められる。
江戸時代後期	杵築藩の儒員・島徳世によって、田染八景に漢詩が添えられる。鍋山についての漢詩も詠む。
明治３０年頃	水崎の僧侶で教育者の東陽圓月が鍋山啼猿を題材に漢詩を詠む。
明治４０(1907)年	井上円了が鍋山周辺を訪れて漢詩を詠み、鍋山を「南屏峡」と名付ける。その後、紀行文『南船北馬集』にその事を掲載する。
明治４０年	大分県発行『大分県写真帖』に、鍋山が掲載される。
明治４４(1911)年	井上円了が『日本周遊奇談』の中で、鍋山を「南屏峡」と名付けた例を再度取り上げる。
昭和２６年	国東半島県立自然公園に指定される。
平成初頭	大分県のふれあいの河川整備事業によって、河川公園として整備される。

第２節　構成要素及び周辺の要素

〇鍋山（岩峰群）

田染平野字周ケ尾に位置する柱のように屹立する凝灰角礫岩の岩峰群。古期宇佐火山岩類の火山砕屑岩の地質にあり、桂川による差別侵食を受けて屹立する岩山が露出するようになった。南北に２００ｍほどの範囲に、高さ２０～４０メートルの岩柱が並んでいる。

貝原益軒『豊国紀行』の記述から、少なくとも江戸時代前期には鍋山と呼ばれ、奇勝と評価されていたことが分かる。鍋山は「並べ山」が転じた呼称であると推測される。

江戸時代後期には、杵築藩の画家・十市石谷により山水画の画題として選ばれた田染八景の一景に数えられ（「鍋崖啼猿」）、同じく杵築藩の儒員・島徳世や、哲学者・井上円了らによって漢詩も読まれた。

島原藩領田染組村絵図の観音堂村絵図に鍋山の絵がランドマーク的に描かれ、その後、十市石谷の絵画や、明治時代以降の写真などが残されていることから、その風景はほとんど変化せずに現代へと伝わっている。

〇三宮八幡神社

田染上野字鍋山に所在する神社。縁起によれば、田染郷における宇佐神宮の別宮・元宮八幡神社に祀られる３柱の神（田心姫命・湍津姫命・市杵島姫命）を、それぞれ元宮八幡神社・二宮八幡神社・三宮八幡神社に分祀してつくられたとされる。氏子圏は、上野村・観音堂村・熊野村・田野口村・薗木村・陽平村・

真木村・菊山村にわたる。現在でも 10 月の田染地区の秋季大祭では、三社の神輿が各村を巡りながら、田染中村の御旅所に集合する。

本殿は明治～大正時代に建てられたとされ、横長の回廊式の拝殿と申殿を伴う国東半島の社殿の伝統的な配置となっている。

井上円了は境内から西側を望み、鍋山や田染八景に関する漢詩を詠んだことが、その内容から分かっており、現在も三宮八幡神社が鍋山の視点場となっていることから、「三の宮の景」と呼ばれている。

☆周辺の要素

〇鍋山井堰

田染荘・上野条里における最大の取水地点となる井堰。現在はコンクリートによる補強がなされたが、岩盤の高低差を使用して築造された井堰で、古代から現在にかけて移動していない。田染荘の水利の重要な箇所として、周囲に神社・磨崖仏などの信仰物が集まっていった。

〇鍋山磨崖仏

田染上野字高取に所在する磨崖仏。平安時代～鎌倉時代の作の不動三尊像。中央の不動明王の高さは約 230cm、左右の童子の高さは約 120cm ほどである。熊野磨崖仏、元宮磨崖仏とあわせて国の史跡に指定されている。

鍋山井堰の北側丘陵部に位置しており、水源に関する信仰と結び付いていると言われている。中世には稲積岩屋、江戸時代には稲積不動と呼ばれており、「鍋山石仏」の呼称は昭和初期の『田染村志』から確認できる。

第３節　鍋山（南屏峡）の価値

田染地区における桂川の上流域に位置する「鍋山（南屏峡）」は、細い柱状に並び立った岩峰群と、その岩峰群から川を挟んだ場所に位置する三宮八幡神社の境内からなる名勝地である。

国東半島の西側の付け根にあたる田染地区は、古期宇佐火山岩類の火山砕屑岩と両子山の火山群の岩石がつくる岩峰に挟まれた盆地状の地形をしている。特に古期宇佐火山岩類の火山砕屑岩の地質の場所には、特に垂直に屹立した岩石が露出した場所が多く、その地形を活かして、古来より熊野磨崖仏に代表される大型の磨崖仏が造顕されたり、観賞の対象となってきた。

鍋山（南屏峡）の岩峰群は、約９万年前の阿蘇カルデラの形成に伴う火砕流によりつくられた古期宇佐火山岩類の火山砕屑岩の火砕流台地が、桂川の差別侵食を受けて形成された。桂川に沿って長さ２００メートルの範囲で屹立した岩壁が露出し、高さは２０～４０メートルに及ぶ。岩峰群は立ち上がりからほぼ垂直に屹立し、一部は桂川側に少し傾いている。

奈良時代、田染上野の集落の上流に位置する鍋山（南屏峡）付近の岩盤に、鍋山井堰が築かれ、田染地区でも最大の上野条里が拓かれた。その後、田染地区には平安時代に宇佐神宮の根本荘園の１つ「田染荘」が立荘され、鍋山（南屏峡）の一帯は、中世を通して、田染荘の水に関する重要地点として、人々の崇敬を集めていった。鍋山井堰の北側丘陵には、高さ２．３メートルの不動明王三尊を彫る鍋山磨崖仏（史跡、平安～鎌倉時代）が造顕され、南北朝時代には田染真中の元宮八幡神社から、市杵島姫命が分祀され、鍋山（南屏峡）の岩峰群の川向かいに三宮八幡神社が創建された。

鍋山（南屏峡）の風致に関する記述や表現は、元禄期に遡ることができる。元禄２(1689)年に原本を持つ島原藩領田染組村絵図の内、観音堂村絵図を見ると岩の柱が５本ほど描かれている。また、元禄７(1694)年に付近を訪れた貝原益軒は『豊国紀行』の中で、「奇観なり」「かようの珍しき岩まれなり」と評価し、「其所をなべ山といふ」という記載から、少なくとも江戸時代前期にはその岩山を「なべ山」と呼んでいたことが分かる。

その後、江戸時代後期には、鍋山（南屏峡）は杵築藩の絵師・十市石谷によって、西叡山などとともに画題として田染八景の１つに選定され、後に杵築藩の儒員・島徳世によって田染八景は漢詩に詠みなおされた。明治 40(1907)年に田染を訪れた哲学者・井上円了は、鍋山（南屏峡）の付近で田染八景を漢詩に詠み、すでに小耶馬渓と呼ばれていた鍋山の風景を、西叡山と対比させて、南屏峡と名付けた。

それから鍋山（南屏峡）は、明治 40 年刊行の『大分縣写真帖』をはじめ、大正～昭和時代にかけての地誌に、度々写真が掲載されているが、現在の風景とほぼ変化していないことが確かめられる。昭和 26 年には、鍋山（南屏峡）も国東半島県立自然公園に指定され、岩峰や神仏習合文化の観賞スポットとして親しまれるようになり、一帯の景勝地は「三の宮の景」と呼ばれている。平成初頭には河川公園も整備され、桂川を渡ることもできる遊歩道が整備された。

以上のように、鍋山（南屏峡）は国東半島田染地区における荘園開発に関する信仰の重要な地点であり、柱状に聳える独特な形状の岩峰群がつくる風致は観賞の対象としても著名で重要である。

第３章　鍋山（南屏峡）と豊後高田市

第１節　名勝地としての鍋山（南屏峡）の意味

豊後高田市は田染地区の文化財や歴史的景観の保護に古くから取り組んでいる。

昭和 50 年代より、大分県立風土記の丘歴史民俗資料館による荘園村落遺跡詳細分布調査が始まると、その最初のフィールドとして豊後国田染荘が選ばれ、かねてより知られた仏教遺産（富貴寺大堂や磨崖仏など）だけではなく、荘園村落遺跡として保護するべきという提起がなされてきた。

豊後国田染荘の調査が終了してから平成初頭にかけては、富貴寺境内・小崎の集落と水田景観・長野観音寺跡・朝日岩屋・夕日岩屋・大曲地区の水田景観・熊野墓地・牧城と城山薬師堂・烏帽子岳城・蕗政所跡など、荘園を形成する様々な要素をまとめて、史跡指定を目指すといった方向性も示された時期もあった。

しかし、各地域において予定される圃場整備や後継者不足などの問題を抱えた状態では、ただちに田染荘全域の史跡指定を目指すことはできないという方針が示され、保護が必要な各所の保存活用に個別に取り組むこととなった。田染小崎地区では農水省の田園空間博物館整備事業による整備を行い、平成 22 年には田染荘小崎の農村景観として国の重要文化的景観に選定され、平成 25 年には富貴寺境内が国の史跡に指定された。

また、平成 25～27 年度に実施された大分県の名勝に関する特定の調査研究事業によって、国東半島の岩山景観と六郷山寺院群にまつわる名勝地について検討がなされ、田染地区については平成 28～29 年度にかけて、文化庁の補助事業として田染耶馬名勝調査事業を実施し、平成 30 年３月に『国東半島田染名勝調査報告書』を刊行した。同調査では島原藩領田染組村絵図をベースに、岩山景観と荘園との関係性について調査を行った。特定調査地は、鍋山に加え、朝日岩屋及び夕日岩屋・穴井戸観音・ウトノアナ及びゼゼノサマ・喜久山・西叡山の６箇所となり、ランドマークとしてだけではなく、水利や信仰との関連性について言及された。

鍋山（南屏峡）は、近隣の鍋山磨崖仏が史跡に指定されていたため、平成初頭の史跡指定を目指した場所ではなかったが、鍋山井堰や上野条里とは地理上・地形上重要な関係があり、田染荘全体を理解する上でも重要な場所であると言える。また、古くから観賞の対象となってきた岩山は、市民にとっても馴染み深く、名勝地として保全することで、田染荘全体をより良く保存活用していきたい。

第２節　保存活用について

今回「鍋山（南屏峡）」として保護すべき範囲は険しい岩山であるため、現状ではほとんど開発行為が行われる状況ではない。

しかし、保護すべき範囲や、鍋山磨崖仏周辺及び三宮八幡神社後背の丘陵部は、急傾斜かつ大きな転石が多く、災害防止の観点から法面保護やアンカーボルトの設置などが進められている。鍋山（南屏峡）は屹立する岩山が中心となる名勝地であるので、周囲の災害対策などの計画と連動した保存・整備等が必要となってくる。

また、自然的要素及び自然公園の便益施設（三の宮の景のふれあい河川公園の園地など）の環境保全にも課題があり、観賞上の支障となる樹木の管理であったり、ふれあい河川公園の設備の維持管理をする

人材が地域に不足している現状がある。

活用については、田染上野での検討に加え、田染荘全体でも検討する必要がある。

前節でも記載したが、田染荘は荘域全体での保存活用をすることで、荘園村落遺跡としてより深い理解を得ることが可能である。田染耶馬名勝調査事業において、調査がなされた名勝地についても、保護の対象とするための準備を行い、史跡・重要文化的景観との連携をしながら、保存活用に努めていきたい。

以下に、鍋山（南屏峡）の保存活用における課題を整理しておく。

①景観保全の継続実施	現在実施されている景観保全の取組を継続して実施する。 景観保全に関する後継者・協力者を見つける。
②周知広報・普及啓発	出前講座など市民向けの見学イベント 鍋山（南屏峡）についての説明看板等の設置

○参考文献・資料

大分県『大分縣写真帖』（1907 年）

大分県企画振興部景観自然室編『国東半島県立自然公園環境学術調査報告書』（2009 年）

大分県立風土記の丘歴史民俗資料館『豊後国田染荘の調査』

田染村志編集委員会『田染村志』

東洋大学創立 100 周年記念論文集編纂委員会編『井上円了選集 12』（1997 年）

文化庁文化財部記念物課『名勝に関する特定の調査研究事業報告書（大分県の名勝に関する特定の調査研究事業）』（2016 年）

豊後高田市教育委員会『国東半島田染名勝調査報告書』（2019 年）

豊後高田市教育委員会『六郷満山寺院群詳細調査事業報告書』（2016 年）

豊後高田市『豊後高田市史』（1998 年）

西国東郡編『西国東郡誌』（1923 年）

○参考史料

井上円了『南船北馬集　第２編』（1907 年）

井上円了『日本周遊奇談』（1911 年）

貝原益軒『豊国紀行』（1694 年）

『島原藩領田染組村絵図』（1836 年／1689 年原本、豊後高田市所有）

『六郷山諸勤行幷諸堂役祭等目録写』（1228 年、長安寺文書）

『六郷山本中末寺次第幷四至等注文案』（1337 年、長安寺文書）

鍋山（南屏峡）名勝調査報告書
資料編

【図版】

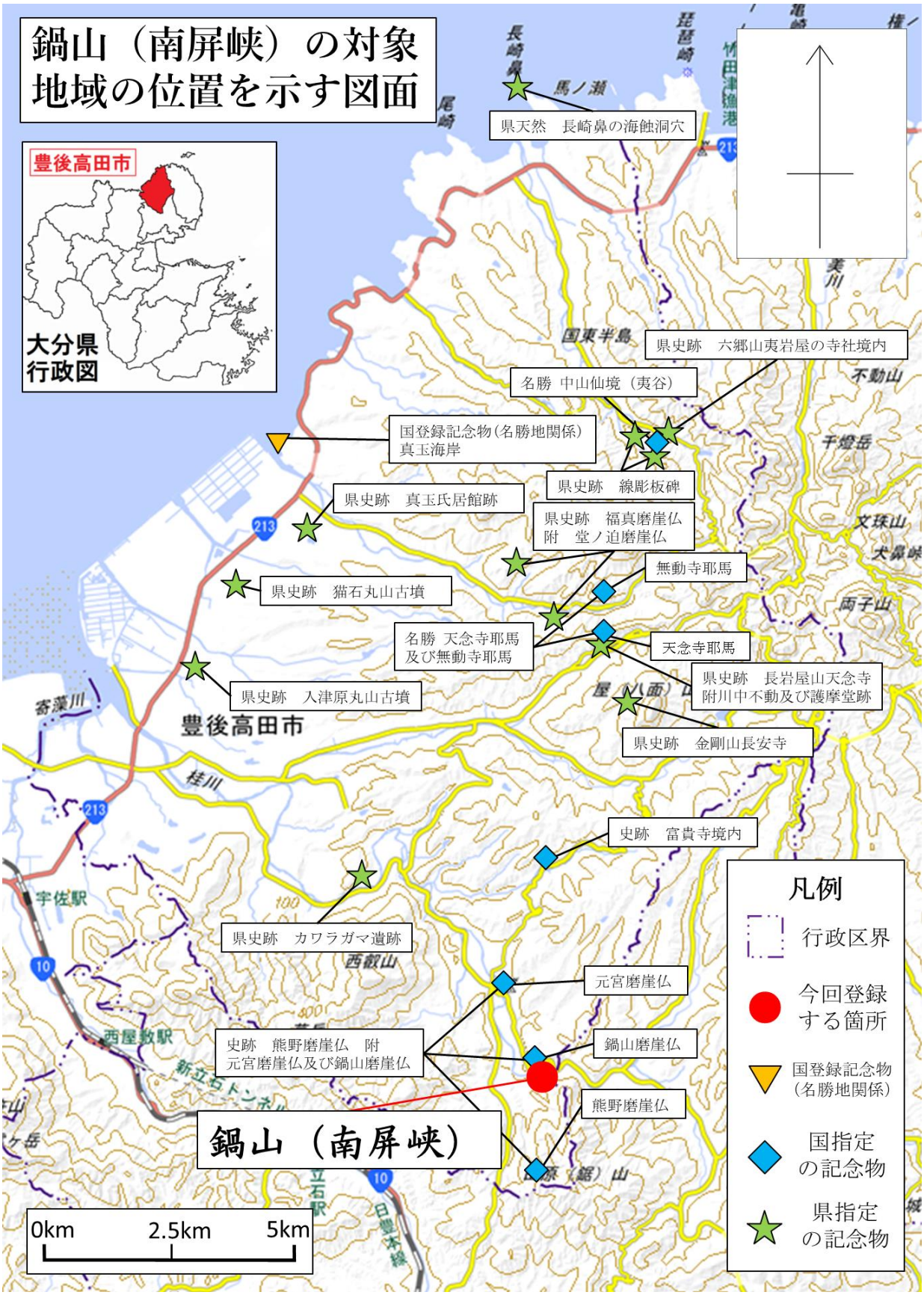

図１：鍋山（南屏峡）の対象地域の位置を示す図面

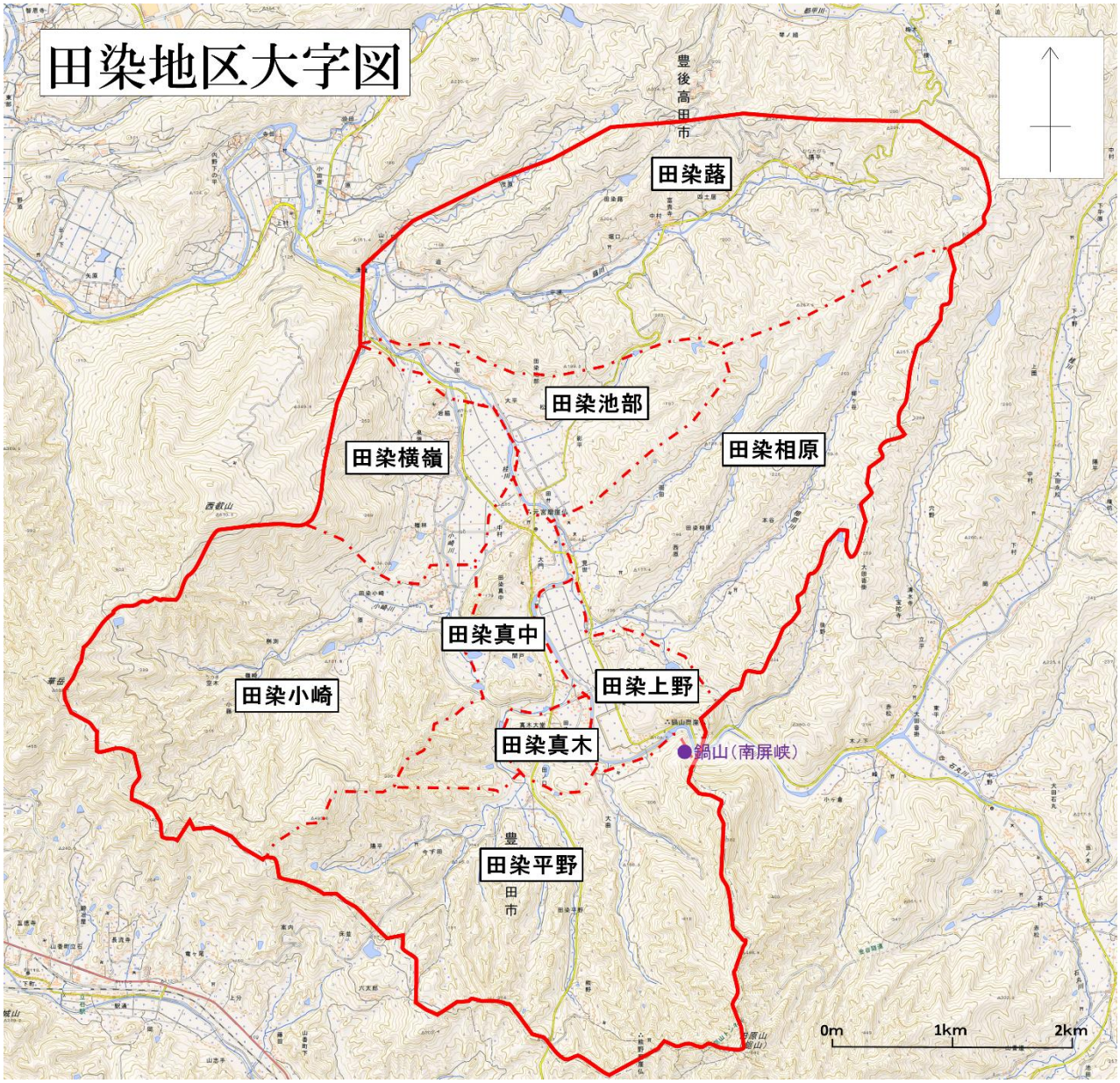
田染地区大字図
豊後高田市
田染蕗
田染池部
田染相原
田染横嶺
田染真中
田染上野
田染小崎
田染真木
鍋山（南屏峡）
田染平野
豊田市
0m
1km
2km

図２：田染地区大字図

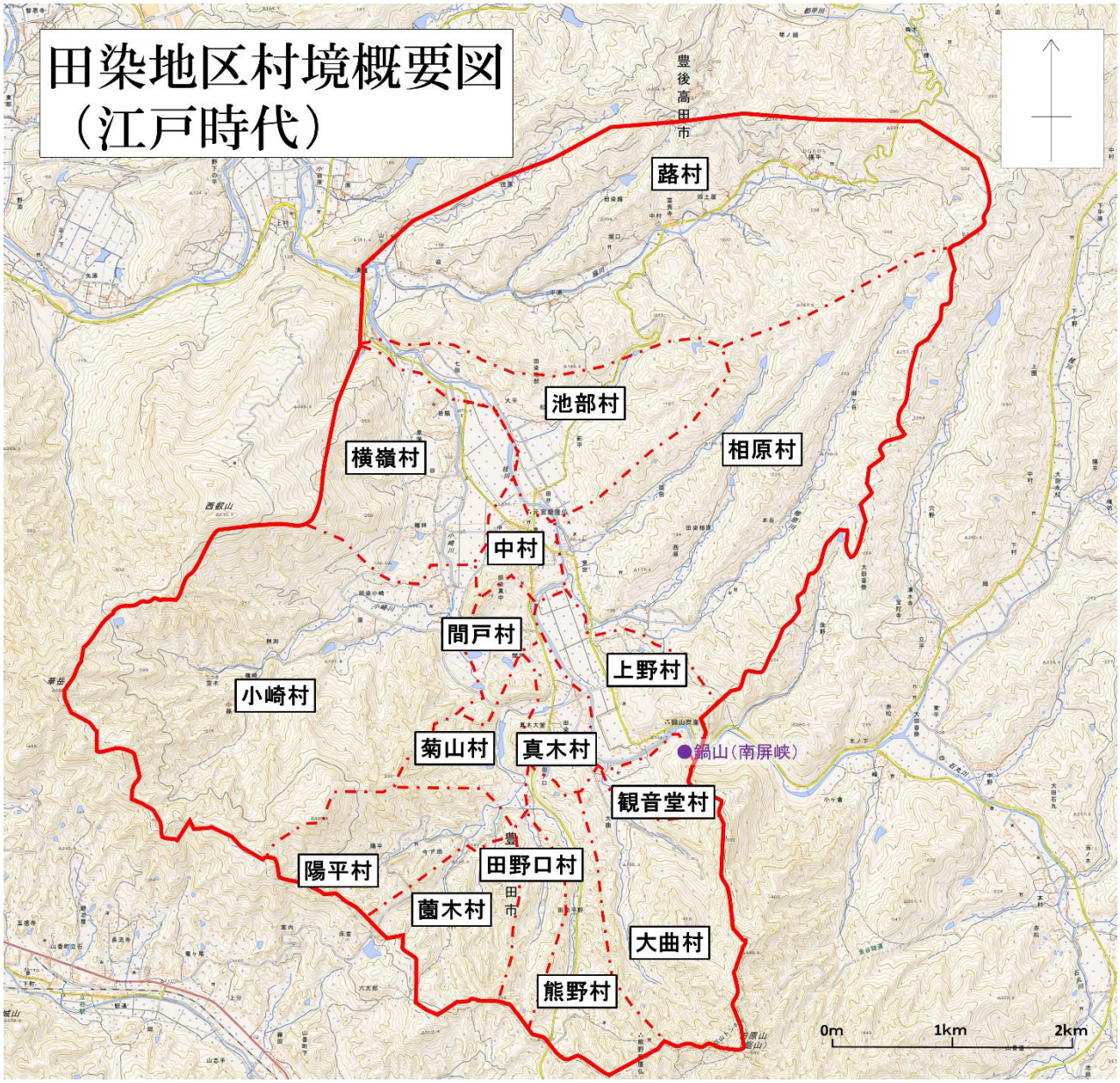

図３：田染地区村境概要図（江戸時代）

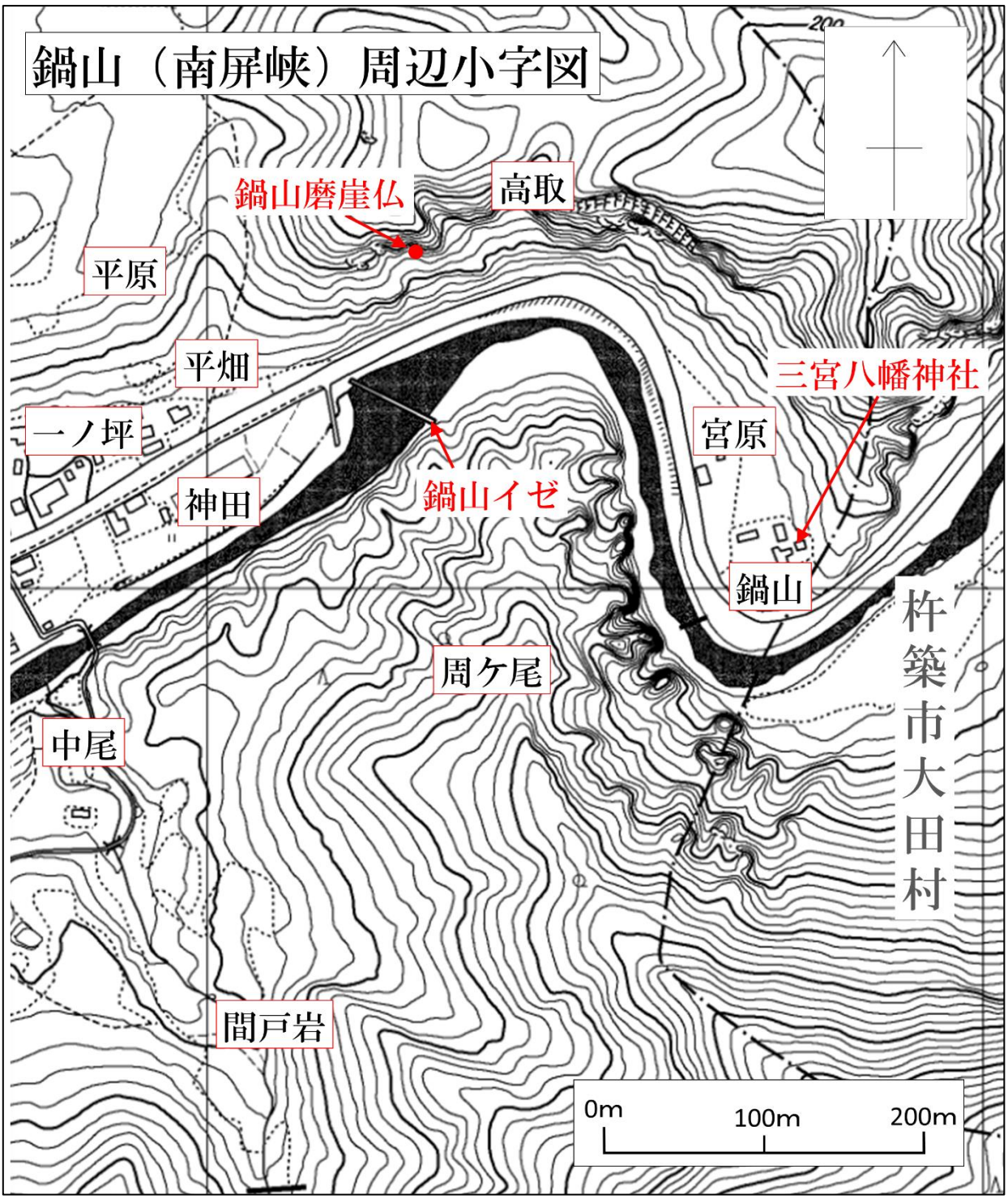

図４：鍋山（南屏峡）周辺小字図

※地形図に表示される市境などは必ずしも正確ではない。

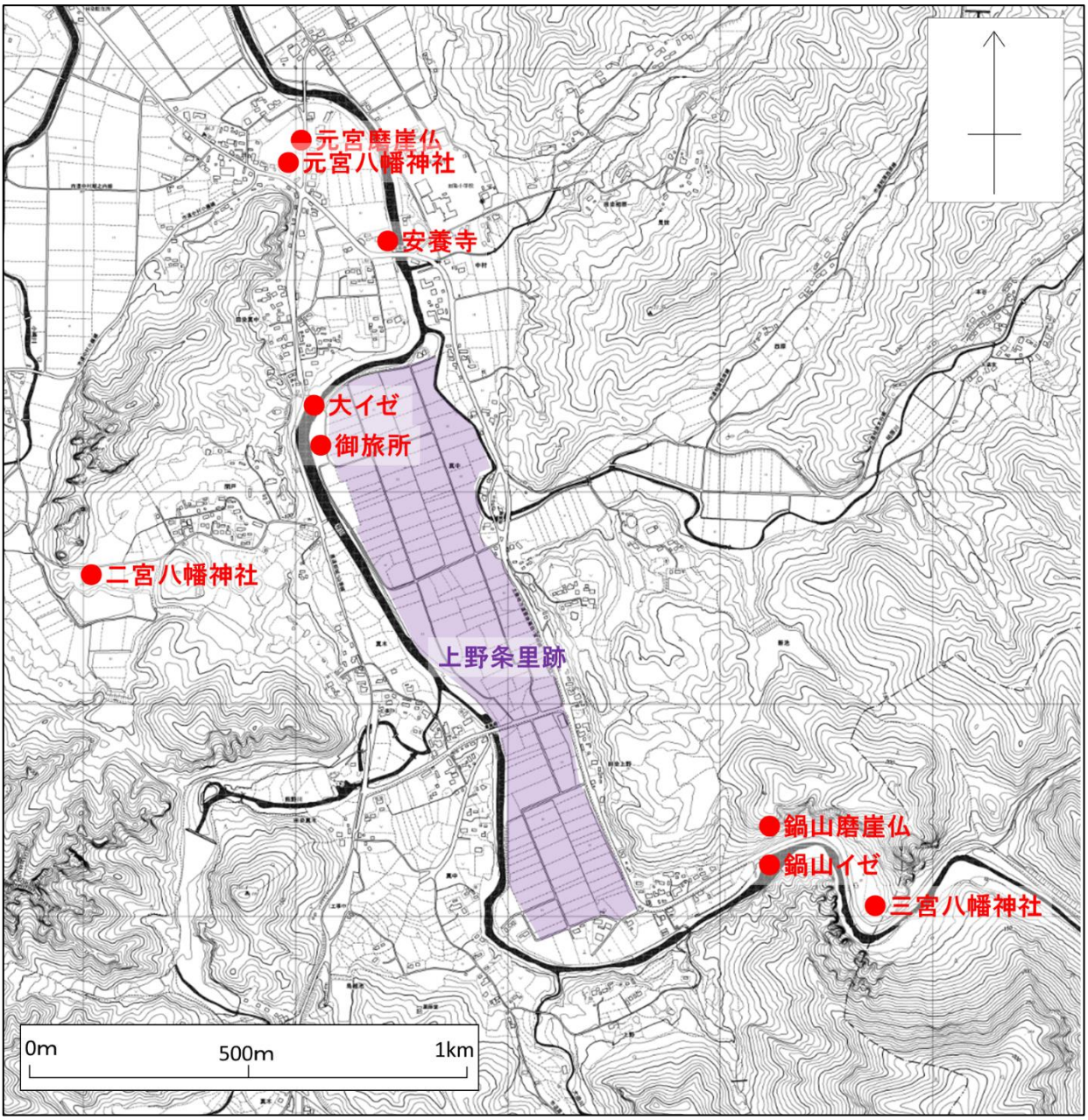

図５：鍋山（南屏峡）周辺の要素の位置図

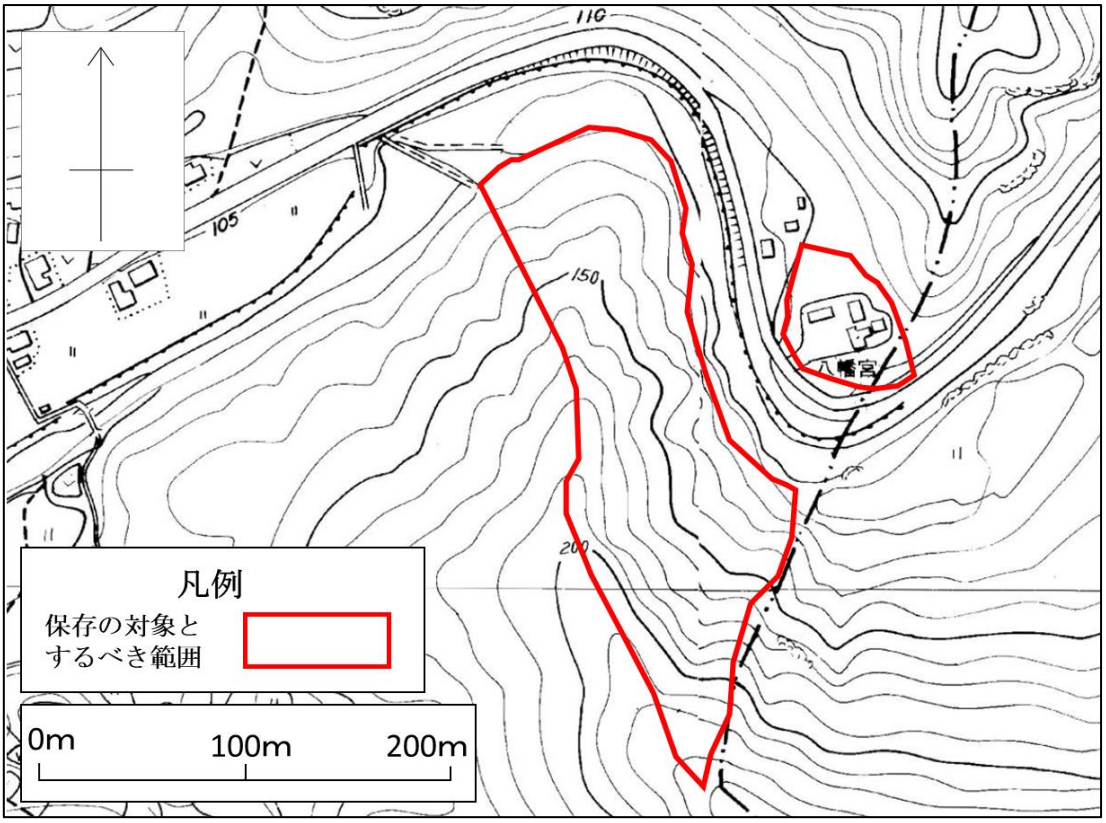

図６：鍋山（南屏峡）範囲図（地形図）

※地形図に表示される市境などは必ずしも正確ではない。

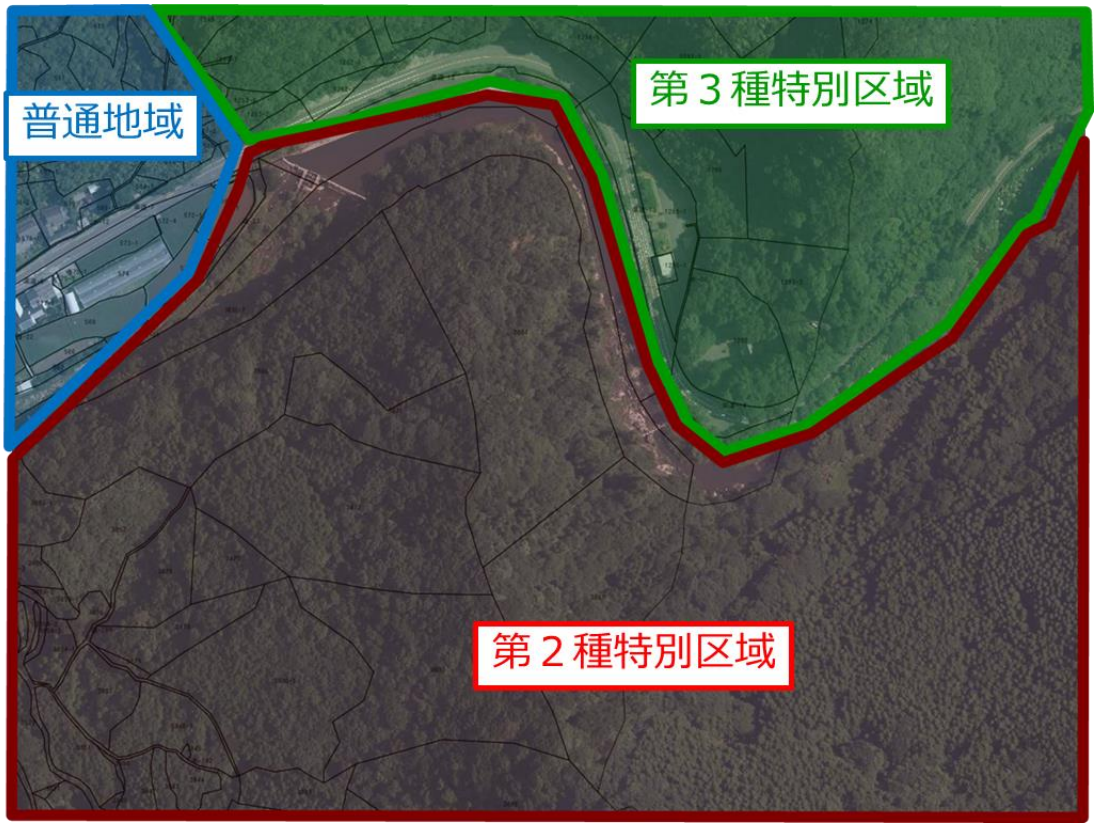

図７：国東半島県立自然公園の規制の範囲

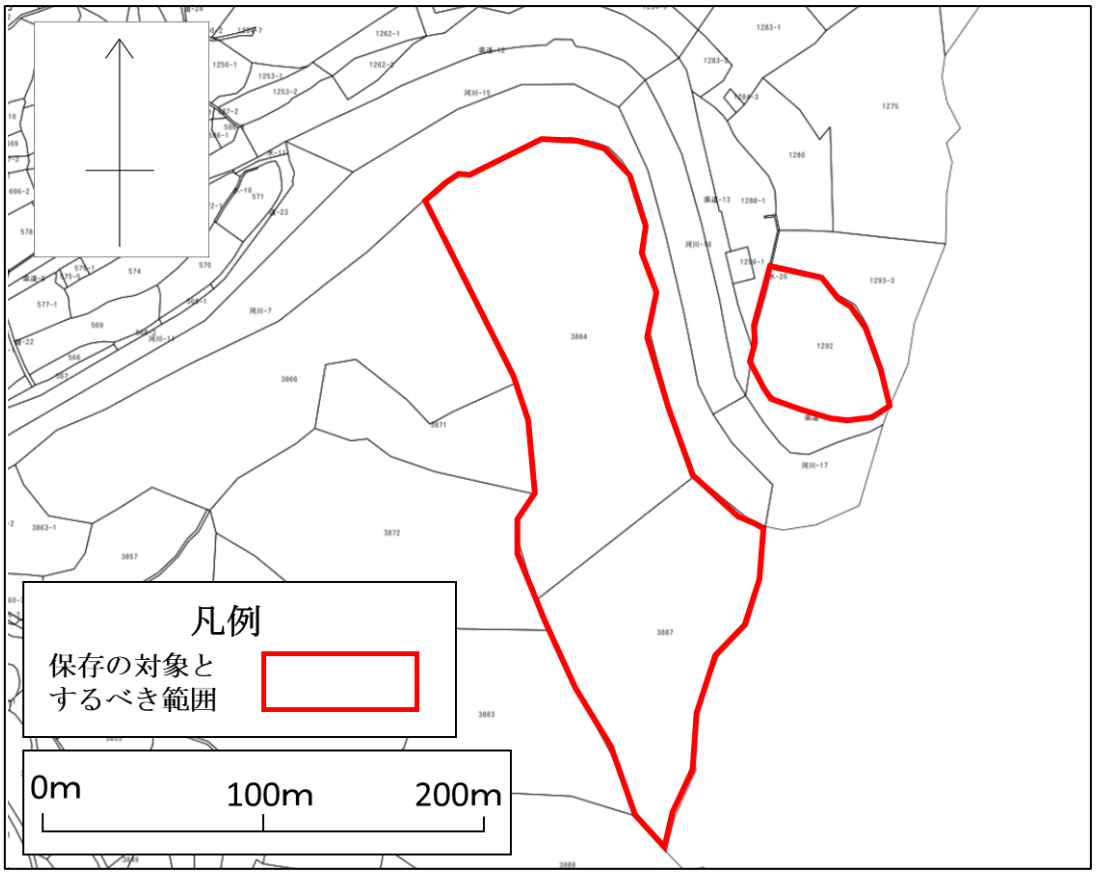

図８：鍋山（南屏峡）範囲図（公図）

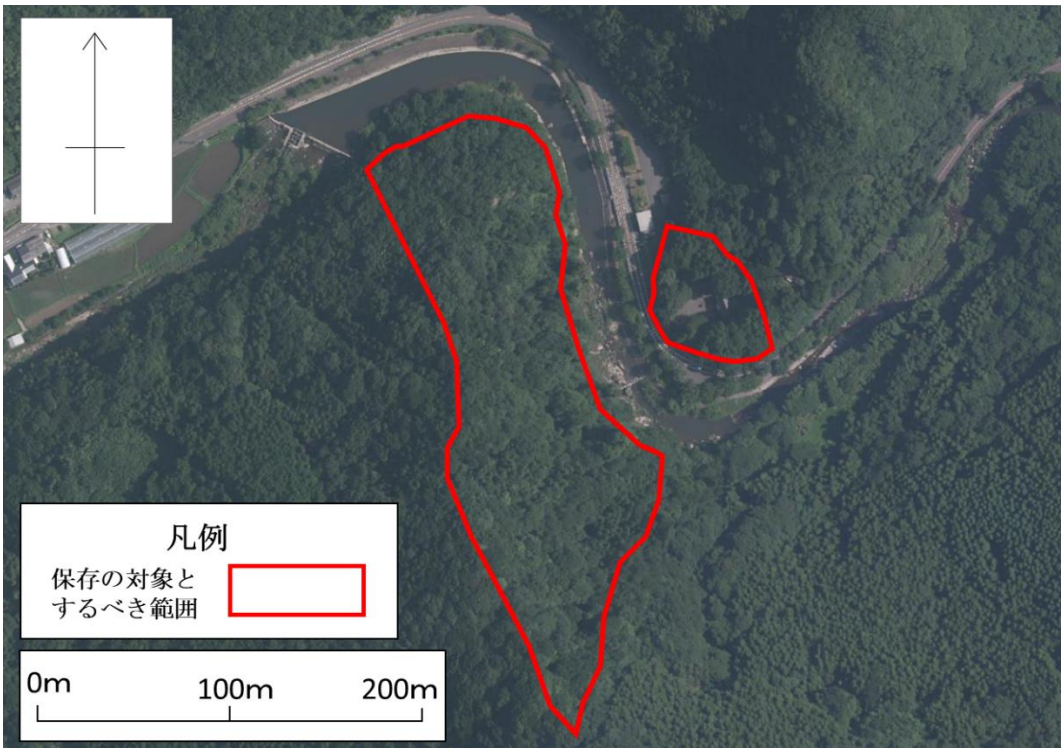

図９：鍋山（南屏峡）範囲図（航空写真）

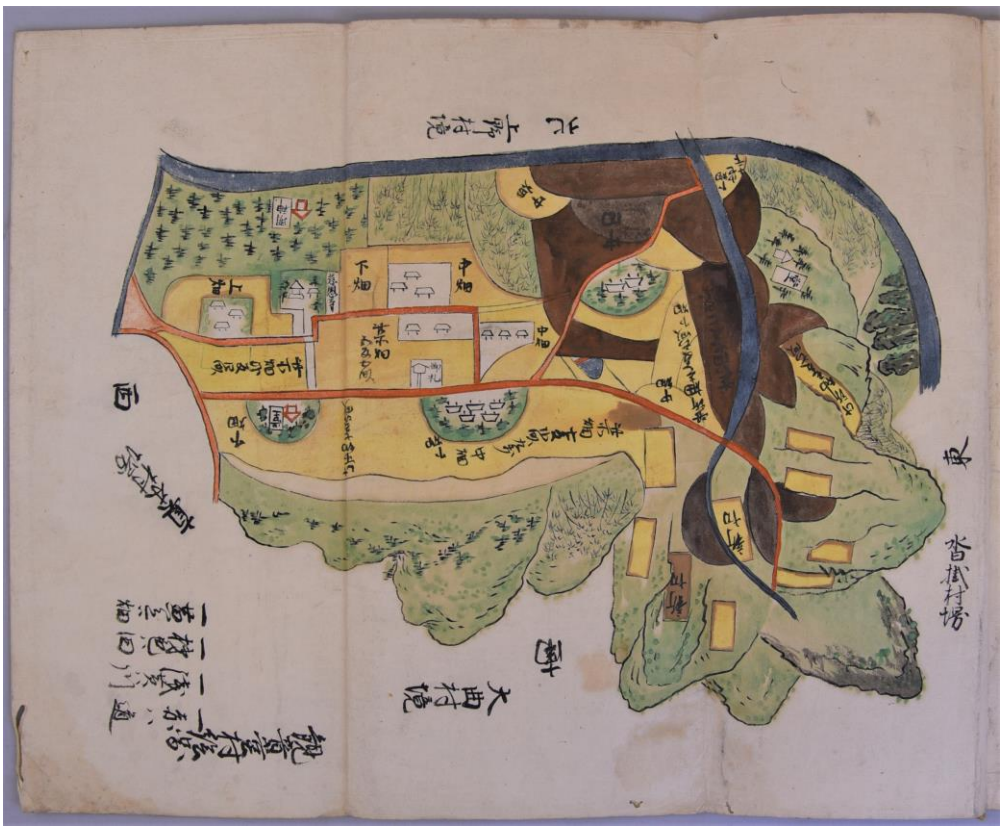

図 10：島原藩領田染組村絵図（観音堂村）

図 11：島原藩領田染組村絵図（上野村）

図 12：鍋岩図（十市石谷山水画冊）

図 13：田染八景図（安養寺蔵：正井和行作）

【鍋山（南屏峡）に関する文献等】

■貝原益軒『豊国紀行』より
高田より木付の間には馬驛なし、山中を通るに其ノ間田染と云村あり。高田より三里あり。此所にて暫く休む。田染より木付へ四里半あり。田染より東に半里許行て、道の西の傍に河の畔に高く峙ちて大岩十五六許つらなれり。其高さ十間餘り、或いは八九間あり。奇観なり。羅漢寺の前なる大岩に似たり。其外かやうの珍らしき岩まれなり。其所をなべ山といふ。夫より南方に山を越ゆくに、此間道さがしく坂長し、東南の方に山を登る事半里許にして嶺より木付の方へ下る事一里半あり。此坂をはたかた峠といふ。坂より田染のかたにははたかたといふ里あり。

■井上円了『南船北馬集　第２集』（明治４０年６月の項）
十六日　晴れ。午前、高田を発し、山行数里にして田染村に着す。途上所見、左のごとし。
武陵渓上路横斜、欲賞夏光時駐車、万緑叢中紅点々、杜鵑無語只看花、
（武陵桃源郷のごとき谷のほとり、道は斜めによこぎり、夏の光にきらめく風景をめでようと、ときどきは車をとどめたのだった。すべてが緑におおわれ、くさむらにあかい花が点々と色を添えているが、ほととぎすの声もなく、ただ花をみるのみであった。）
所々、刈麦すでに終わりて挿秧を始む。農家の繁忙知るべし。田染村に入るや、生徒路傍へ整列して歓迎す。会場は小学校なり。

十七日　雨。当村には八景あり。その中にて奇なるは鍋山の勝なり。晨起してここに吟笻をひく。
昨日以来の経過を詩中に入るる。
端午時過梅漸黄、渓辺已見挿新秧、薫風西叡山南路、一夜来投田染郷、
（端午の時節もとうにすぎて梅はようやく黄ばみ、谷川のあたりではすでに新しい苗が植えられているのを見た。初夏の青葉をふく風のなか、西叡山の南の道をたどり、一夜を田染村にすごしたのであった。）
樹色入窓灯影青、水声懸処認飛蛍、淡雲繊月多幽趣、繞屋翠巒為枕屏、
（濃い樹木の色が窓辺より入って、ともしびも青みをおびるかと思われ、渓水の流れる音のするあたりに蛍のとびかうのが見える。淡い雲やかぼそい月など、ここには奥深いおもむきがあり、家をめぐるみどりの山々はまるで枕屏風のように思われたのであった。）
晨起行過古社西、危岩兀立似雲梯、天工奇絶比無物、俚俗呼成小馬渓、
（朝早くに古い社の西を散策すれば、めずらしい形をした岩が高く立ちあがって、まるで雲にとどくはしごのようである。自然のたくみの絶妙であることは比べるものとてなく、この地の人々は小耶馬渓と呼んでいる。）

人これを小馬渓と呼ぶも、決して耶馬渓の付庸にあらず。あるいは紀南の瀞八丁に似、あるいは小豆島の寒霞渓に似たるところありて、全然独立せる一奇勝なり。これを鍋谷というは雅称にあらず。

よって余は南屏峡と名付く。西叡山と好一対となる。田染八勝とは大堂梵鐘、熊岳山桜、桑川流蛍、池部群鷺、間戸涼蟾、本宮晴嵐、鍋崖叫猿、叡峰雪暁をいう。余、一詩に八勝を入るる。

田染由来風月幽、国東此景最為優、雪明西叡峯頭暁、猿叫南屏峡畔秋、
間戸桑川宜夏望、本宮熊岳適春遊、鷺飛鐘吼朝兼夕、八勝四時好散憂、
（田染の地はもとより風月もおくゆかしく、国東地方におけるこの風景はもっともすぐれたものである。雪をいただく西叡山峰のあかつきのさま、猿の叫ぶ声がひびく南屏峡の秋、間戸や桑川は夏のおもむきをみるによく、本宮や熊岳は春の行楽によし。鷺がとび梵鐘は朝夕ともにひびきわたる。田染の八景勝は四季を通じて人の世の憂いを消すによい。）
聞く、臼野にも八勝ありという。余、これを一見せざりしは遺憾なり。
午後、大雨をおかして出演す。後に茶話会ありて、修身教会設置を決議す。発起者中に特に尽力ありしは豊田玄智氏、吉田秀導氏、桑尾重代氏等なり。桑尾氏は校長なり。

十八日　曇り。鍋谷を経て田原村に入る。生徒の歓迎、田染に異ならず。この辺り山容雲態おのずから仙郷の趣あり。
南屏峡外一郷開、雨過挿秧処々催、雲容山態非人境、民情風俗亦蓬莱、
（南屏峡のはずれに一村がひらけ、雨あがりのなかところどころで田植えがおこなわれている。雲のすがた山のようすは人の住むところとも思われぬ。この地の人の心も風俗もまた神仙が住むという蓬莱のおもむきがあるのである。）
を吟詠しつつ宝陀寺に着す。寺は大同年間の創立にして、有名の古刹なり。山門は丘上にあり、緑陰庭に満つる所、燕子花を見る。夏光の間、雅なるは愛すべし。

（中略）

二十二日　（前半略）
日向地方平地多くして山水の景に乏しきは、予想外に感ぜしと同時に、豊後地の平地に乏しくして山水の景に富めるは、また想像の外に出でたり。紀州熊野地と相対して日本の絶勝地と定むべし。人情も淳朴にして、よく賓客を厚遇歓待する風あり。また、風流を愛し雅致を喜ぶ風あり。ただ、公道および公共物に楽書を見ること、他府県より多きように感じたり。また、迷信も比較的多きがごとく認めり。また、宗教は一般に普及するも、旧式を固守するにとどまり、活動の風をあるを見ず。学校教育も一段の発展を要するがごとし。これ、余が今より修身教会を開設して公徳を養成し、風俗を矯正し迷信を一掃し、人をして進取活動せしむるの必要を感じたるゆえんなり。

■井上円了『日本周遊奇談』（明治４４年７月２３日刊行）
第四類　山水温泉
第四九話　山水命名
　耶馬渓はもと中津辺りにて、その地が山の谷間なる故、ヤマ（山）と称したのを、頼山陽これを耶馬と改めた。また、小豆島の古来神掛ととなえたる地名を、ある人これを寒霞渓と改めた。余もそのまねをして、豊後大野郡沈堕ととなうる瀑布を鎮蛇として、この瀑布は前後二流のかかりて落つるものにて、高さは一つは十五間、一つは二十間なれども、幅は三十間もある。あたかもナイアガラの小模型である。また、西国東郡鍋山の絶勝を南屏峡とし、姫島その形軍艦に似たれば艦島として、飛騨益田川中山七里の間に

岩石相重なりて一大岩となり、天然に奇形をなせるものあるも、その名のなきを聞き、あたかも十六羅漢の列を成して天より降下する状に似たれば羅漢岩と命名した。北海道網走にニクル山の地名あれど、漢字をこれにあてはめてないから、新米山と定めた。そのほか豊後佐伯の煙草峰のごとき、壱岐郷浦の多景峰のごとき、余の雅名を下したものがたくさんある。

■『西国東郡誌』田染八景の項（193 頁）

田染郷は旧時広大の境域を有し、山谷の奇勝に富み、絶景の名区多し。今北方河内村境より、東田原村界に至るの間、泉石絶佳の境鮮しとせず。嘗て十市石谷此に遊び、八景を選擢して其画図を作り、前年井上圓了博士之れに詩を題すと云ふ。八勝の名、乃ち左の如し

叡峯曙雪　池部群鷺　桑川蛍火　本宮晴嵐　間戸山月　大堂晩鐘　熊野櫻花　鍋山啼猿

■『西国東郡誌』鍋山の項（197 頁）

『仰ぎ見る空も危し疾く過ぎよ、崩残りたる岩の下道。』実境に臨まずして此和歌を一読せば、誰れが慄然として其危険を想はざる者あらん。されど公道川を隔てゝ坦々砥の如く、馬を馳せ車を駆る。平安快意、些の苦難を感ずるものなし。田染村より田原村に至るの途上、前路の左傍に一森の社頭を望み（三宮八幡神社）右の方、絶壁削るが如き数基の磈巌、根底を流れに托して、屹然雲表に聳ゆるを見るもの、之を名けて鍋山の渓澗と云ふ。風色佳絶の景光は、誌中既に序記したれば、此に左の詩賦紀文を掲げ、以て名区の実境を詳悉するの便に供せん。

過鍋山　　近藤弘記

危巌屹立聳虚空、道傍川流一線通、蘿壁松窓家八九、山人住在画図中、
峻巌峭壁似仙蓑、流水浮雲意自間、路転俄離幽絶域、魚商塩賈複人間、

■『田染村志』村社三宮八幡神社の項（120 頁）

三ノ宮八幡社は、田染村大字上野字鍋山に在り。俗に三ノ宮と称す。地は田原村に通ずる県道に沿い、田染川の上流に枕む。所謂鍋山耶馬の境域にして、社頭数十丈の懸崖屏立し、頗る形勝の地なり。

■『田染村志』田染耶馬の項（189 頁）

天斧鬼鑿、鴻荒の世、一夜揮ひて、田染闔郷の奇嶽怪石を刻刻し来る。所謂田染耶馬なり。而して其の趣態は寧ろ豊前の本耶馬に勝る。科学的に謂へば、火成岩に對する風化水蝕作用なり。勝域汎きに彌る。大別して、熊野耶馬、鍋山耶馬、間戸耶馬の三となすを得べし。

（中略）

鍋山耶馬　田染村より田原村沓掛に至る縣道に沿ふ。村社三宮八幡社畔の渓谷、即ち鍋山耶馬なり。田染川の南岸、数十丈の懸崖壁立して、葛蘿之に纏ひ、崖頭往々老松の舞ふが如きを観る。水は清冽に山は高く、中秋霜華一たび飛べば、満崖の葛蘿凡て紅化して、一幅の丹青を現じ来る。春には流鶯あり、初夏には河鹿の銀鈴を揮ふあり。坐ろに行客をして低回去るに忍びざらしむ。

（後略）

■『田染村志』田染八景の項（190 頁）

杵築の画伯十市王洋（或は云ふ其の父石谷なりと）嘗つて田染に游び、支那瀟湘八景乃至我が邦の近江八景に倣ひて、田染八景を撰び、其の図を画きたるに始まると云ふ。杵築の儒員島徳世亦八景の詩を作る。後年井上甫水博士（圓了）亦斯の地に遊び、八景に詩を題す。博士乃鍋山の為に、佳字を撰びて南屏山と曰ふ。八景左の如し。但し池部群鷺は、近年耕地整理、排水を施行したる為め、其の実を失ふに至れり。

叡峰曙雪　池部群鷺　桑川蛍火　本宮晴嵐　間戸山月　大堂晩鐘　熊岳櫻花　鍋山啼猿

■『田染村志』郷土詞藻・田染八景の項（231 頁）

第一節　田染八景

桑川蛍火

桑川雨後緑初肥　両岸垂楊覆釣磯　日暮丹蛍偏得意　東西南北自由飛

池部群鷺

平田水漲碧於油　吟歩村辺満目秋　白鷺幾群来作伴　知他閑意與人侔

大堂晩鐘

千古大堂伝大名　人言養老此経営　晩鐘響處斜陽淡　両々三々暮鳥鳴

間戸山月

間戸由来翠色濃　幽林怪石路重々　於中勝景君知否　月上巉巖百尺松

本宮晴嵐

一條細路渡橋長　巌岳宮臺気鬱蒼　吟歩已知塵垢盡　晴嵐如水滴衣装

鍋山猿聲

山間一路接渓長　行客争尋寂莫郷　誰識更深山静處　哀猿聲裡断人腸

熊野櫻花

路蟠青壁與雲隣　熊岳巍然知有神　最是東風三四月　櫻花映出満山春

西叡曙雪

山上曾聞有梵臺　即今唯見六花堆　紅暾遥照層巓雪　銀色中間曙色催

【現況写真】

写真１：鍋山（南屏峡）

写真２：鍋山（南屏峡）

写真３：鍋山（南屏峡）

写真４：三宮八幡神社から見た鍋山（南屏峡）

写真５：三宮八幡神社　遠景

写真６：三宮八幡神社　本殿

写真７：鍋山（南屏峡）ドローン遠景

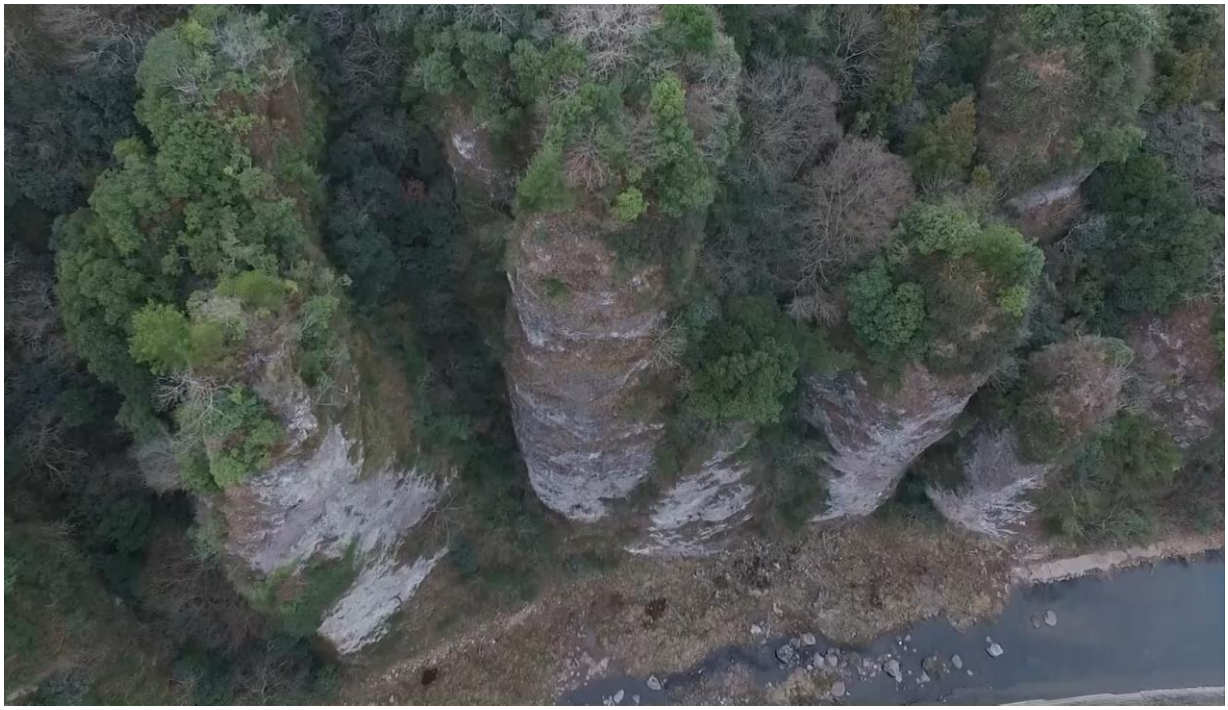

写真８：鍋山（南屏峡）ドローン上部から

【参考：登録区域外】

写真９：桂川（三の宮の景ふれあい河川公園）

写真 10：三の宮の景ふれあい河川公園の園地

写真 11：三の宮の景ふれあい河川公園の園地

写真 12：桂川でのボート体験の様子

写真 13：鍋山井堰

写真 14：鍋山磨崖仏

【古写真】

写真 15：「鍋山」（『大分縣写真帖』（明治 40 年刊行）より）

写真 16：「鍋山」（『西国東郡誌』（大正 12 年刊行）より）

写真 17：「鍋山耶馬」（『田染村志』（昭和 7 年刊行）より）

写真 18：「三宮八幡神社」（『田染村志』（昭和 7 年刊行）より）

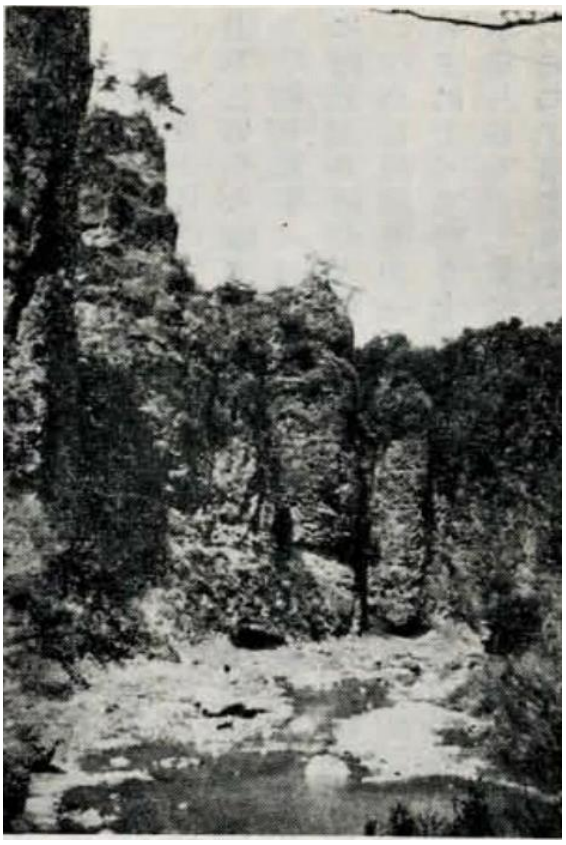

写真 19：「鍋山耶馬」（『豊後高田市誌』（昭和 32 年刊行）より）

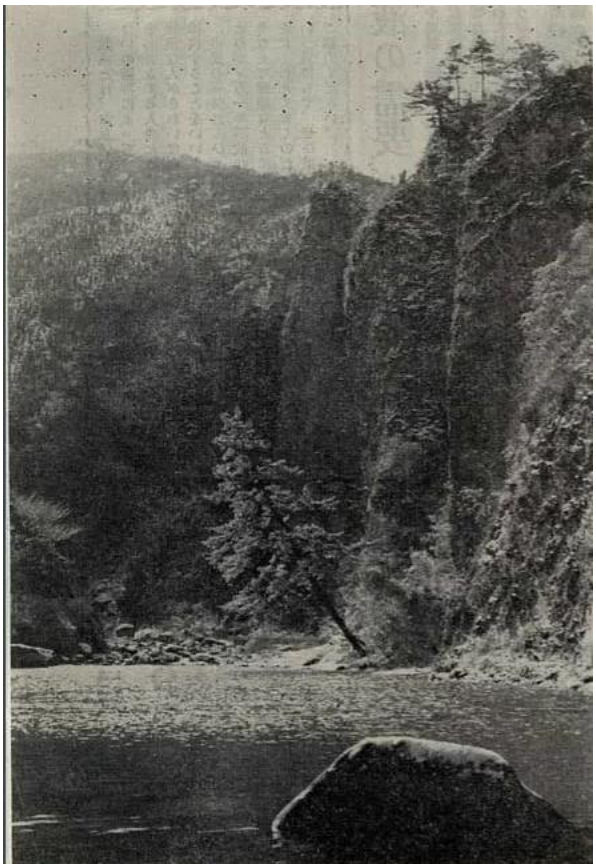

写真 20：「田染耶馬」（『市報ぶんごたかだ』（昭和 47 年 8 月号）表紙より）

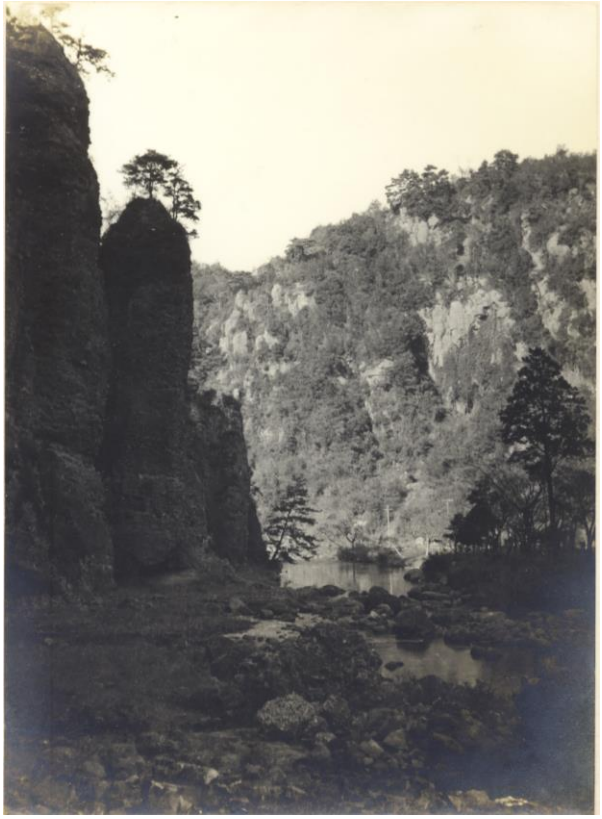

写真 21：「三の宮」（昭和 40 年代）

鍋山（南屏峡）名勝調査報告書

発行日：令和　３年　８月２０日
発行者：豊後高田市教育委員会
〒872-1101
大分県豊後高田市中真玉 2144-12
TEL:0978-53-5112